

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530961

研究課題名(和文) 帝国大学のアジア調査研究 九州帝国大学を中心に

研究課題名(英文) Asian research study in the Imperial University:Focusing on Kyushu Imperial University

研究代表者

藤岡 健太郎 (FUJIOKA, KENTARO)

九州大学・学内共同利用施設等・准教授

研究者番号：00423575

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：帝国大学におけるアジア調査研究の状況について、九州帝国大学を中心として検討を行い、主に以下の点を明らかにした。帝国大学の教官たちによるアジア地域における学術調査研究活動は非常に活発に行われており多くの成果を挙げていること。その調査研究の内容は日本の大陸政策や戦争と強い関連性をもっており、学術的な調査から始まって政策的な関与を強めていった帝国大学教官も少なくないこと。研究分野により調査研究活動の方向性や活発さなどにはかなりの相違が見られること。

研究成果の概要(英文)：This study investigated about Asian research study in the Imperial University, by focusing on Kyushu Imperial University, and clarified these issues as below: Academic research study in the Asia by professors of the Imperial University carried out very actively, and which obtained great results. The contents of the research study had strong relationship to Japanese continental policy and wars, and there are not a few professors who started from academic research ultimately increase involvement in politics. By the research field, considerable differences are seen in directionality or briskness of research activities.

研究分野：大学史

キーワード：帝国大学 アジア 植民地 フィールドワーク

## 1. 研究開始当初の背景

近年、「アジア」を大学名や学部名に冠し、あるいはアジア研究やアジア諸国との国際交流を特徴として打ち出す大学が増えている。本研究代表者の所属する九州大学もまた、「アジアを重視した知的世界的拠点大学」と自らを位置づけ、アジア研究（韓国研究センター設立など）、アジア諸大学との学术交流や留学生の派遣・受け入れに力を入れている。

こうした近年の傾向は逆に、以前は日本の大学とアジア諸国との関係が薄かったこと、特にフィールドワークに基づくアジア調査研究はさほど盛んではなかったということを示している。特に戦後しばらくの間は、アジア諸国への渡航が困難であったため、フィールドワークだけでなく、学会等での研究交流もあまり行えない時期があった。だが、戦前・戦中期に遡れば、フィールドワークが盛んに行われ、アジア調査研究が一定の成果を挙げており、それが現在の日本におけるアジア調査研究の発展につながっているとも言える。

しかしながら、戦前期の帝国大学でどのようにアジア調査研究が実施されていたかについては、実は未解明の部分が多い。日本のアジア調査研究に関しては、これまで満鉄調査部などを対象として優れた研究が数多く行われているが、いずれも大学等の高等教育機関におけるアジア調査研究は主要な研究対象とされていない。こうしたところから、特に帝国大学のアジア調査研究に関しては、まだ研究の余地がある状況である。

以上のような近年の大学の状況とこれまでの研究史に鑑みれば、戦前・戦中期の大学がアジア調査研究をどのように行ってきたかということの解明することで、教育史（特に大学史）研究の進展に大きな貢献ができると思われる。したがって、帝国大学におけるアジア調査研究の実態を解明し、それらの調査研究の意義を明らかにすることが、ぜひとも必要である。

## 2. 研究の目的

本研究は、当時の最高レベルの教育研究機関である帝国大学の研究者たちが、どのようにアジア調査研究を行ったのか、これまで未解明であったその実態を明らかにすることを目的とする。そして、当時最高レベルの知識人たる帝国大学教官が、アジア調査研究という活動を通じて、どのように現実の諸問題に関わっていったのかを解明することが、さらなる目的である。

戦前期のとりわけ帝国大学は、社会のトップリーダーを養成する機関であったが、大学の研究者の多くは、大学内でいわば現実社会に対して超然とした立場から、学理の追究を中心とした研究を行っていたと言える。また大学の研究者が海外に出かけるということは、多くの場合欧米諸国に留学することであった。そうした状況の中で、欧米ではなくア

ジア地域にわざわざ渡航してフィールドワークを行うということは、大学教官が「象牙の塔」を出て現実世界に飛び込んでいったということであり、またアジアという地域が学問の対象として調査研究活動を行う価値を認められるようになっていったということであると考えられる。現在でこそこれらは当然のことであるが、戦前期の、特にアカデミズムの場においては、フィールドワークに基づくアジア調査研究は、特定分野を除いては少数であった。そうした中で、大学人としての彼らがそのような調査研究を行ったのはなぜか、実際にどのような調査研究が行われたのか、そうした調査研究にどのような価値が見いだされていったのか、などについて明らかにしようとするところに、本研究の獨創性がある。

## 3. 研究の方法

- (1)九州帝国大学を中心とした、帝国大学におけるアジア調査研究の実態の解明を行う。具体的には以下の4点を明らかにする。
  - 調査研究資金の出所
  - 資金獲得の過程
  - 調査研究の実施状況の詳細
  - 調査研究の成果の内容
- (2)アジア調査研究が与えた影響とその意義の検討・解明。具体的には以下の2点を明らかにする。
  - 学界への影響
  - 政策や社会への影響

## 4. 研究成果

- (1)帝国大学の教官たちによるアジア地域における学術調査研究活動は非常に活発に行われており多くの成果を挙げていること。

九州帝国大学の場合、1945年までにのべ約550人がアジア地域に出張している。これは他の帝国大学と比較してもかなり多いと思われる。そのすべてが調査研究活動を目的としたものであったわけではなく、研究成果を残していない場合も少なくないが、中には非常に大きな成果を挙げている教官もいる。例えば工学部の木下亀城は南方諸地域（東南アジア）で鉱物資源調査を行い、著書『南方地域の鉱物及鉱業』など数多くの成果を発表している。また、特に農学部ではアジア調査研究が盛んに行われている。中でも川島禄郎は、満洲国開拓研究所の委嘱などにより満洲での土壤調査を頻繁に行い、多くの調査報告を発表した。また、森周六は満洲に始まり、タイにもフィールドを拡げて、農機具調査を行っている。さらに伊藤兆司は、南方諸地域での農政経済調査を行い、著書『南洋農業資源論』など数多くの成果を挙げている。一方、医学部では、研究成果が発表される場合は少ないものの、研究の一環である診

療活動は盛んに行われ、小野寺直助らが頻繁に中国や満洲での診療・臨床調査を行った。

以上の点につき、数量的な分析を行うとともに、個別の事例について検討することで、九州帝国大学を中心とした帝国大学教官のアジア調査研究活動の状況とその成果について明らかにした。

- (2) 調査研究の内容は日本の大陸政策や戦争と強い関連性をもっており、学術的な調査から始まって政策的な関与を強めていった帝国大学教官も少なくないこと。

九州帝国大学においては、1910年代からアジア地域での調査研究活動が始まっているが、当初は純学術的な調査がほとんどで、政策的な目的をもったものは極めて少なかったとみられる。これが変化するのが1931年の満洲事変以降であり、1937年の日中全面戦争開始、1941年の太平洋戦争開戦を経て、急激に政策的な目的をもった調査が増加していく。そのすべてを明らかにすることはできなかったが、満洲国政府や興亜院から委嘱を受けた調査が、数多く行われるようになっていった。

特に農学部ではこのような教官が多い。川島禄郎や森周六などは、当初は純学術的な目的での調査を行ったが、おそらくはその内容が評価されて、満洲国政府などからの委嘱による調査を行うようになっていった。また、伊藤兆司の場合は、当初から政策的な提言を目的として、南方諸地域での調査を行っている。あるいは、法文学部では今中次磨が、汪兆銘政権への協力を行った。

もっとも、全体的に見れば政策に関与した教官の割合は多くはなく、その関与の度合いにも濃淡がある。また、積極的に政策に関与したり戦争協力を行ったりする教官がいる一方で、純学術的な調査研究が政策にも寄与するかたちになった教官も少なくないと考えられる。この時代のアジア調査研究は政策への関与あるいは戦争協力のかたちをとらないと遂行が困難であるが、教官自身の目的意識がいかなるものであったかは、個々人により異なるものであったと考えられる。

- (3) 研究分野により調査研究活動の方向性や活発さなどにはかなりの相違が見られること。

九州帝国大学の場合、アジア調査研究に最も熱心に取り組んだのは農学部の教官たちであったと言ってよい。下表のとおり、九州帝国大学教官のアジア地域への出張回数上位10位以内(計11名)のうち、実に7名が農学部の教官であった。

出張回数	氏名	学部
19	小野寺直助	医
13	田中義磨	農

11	川島禄郎	農
11	森周六	農
10	金平亮三	農
9	伊藤兆司	農
7	田町正誉	農
7	今中次磨	法文
7	鹿子木員信	法文
6	君島武男	工
6	中田覚五郎	農

とはいえ、農学部全体がアジア調査研究に熱心であったわけではない。農学部の中でもアジア地域への出張回数が多かったのは、土壌学・肥料学、農業工学、養蚕学、林学、植物病理学、農政経済学の各分野であった。

工学部では応用化学科(君島武男、寺野寛二ら)と採鉱学科(小田二三男、木下亀城、岡田陽一ら)の教官のアジア地域への出張回数も多く、研究成果の発表数も多い。この両学科は工業原料に関係が深く、資源獲得という観点から、現地での調査研究が特に必要であったためであると考えられる。これ以外の学科でも多くの教官がアジア地域に渡っているが、両学科と比べるとその数は少ないと言える。

農学部・工学部の、特にアジア調査研究が盛んに行われた分野は、いずれも地理的な条件が研究内容等に大きく関わるものであったと言える。こうした分野の教官にとっては、アジア地域でのフィールドワークは研究の拡大につながるものであり、また当時の政策・戦争との関係で、研究資金を獲得しやすい状況にあったことから、特に熱心にアジア調査研究に取り組むことになったと言えよう。

医学部・法文学部では農学部・工学部ほど研究分野ごとの特徴は強くは出ていない。(1)でも見たように医学部では診療活動が多いが、これは臨床系各科いずれも行っている。また法文学部では、アジア調査研究への関わりは、分野によらず教官個人の関心の度合いによっていたものと見られる。

本研究においては以上のような成果を挙げることができた。主な対象が九州帝国大学にとどまってはいるものの、大学全体でどのようにアジア調査研究に取り組んでいたかということについて、ある程度網羅的に明らかにした。また、個別の研究者が具体的にどのようなアジア調査研究を行ったかということについて、いくつかの事例研究から明らかにした。大学の研究者たちが戦前期にアジア地域においてどのような調査研究活動を行っていたかについては、これまで十分な研究の蓄積はなかった。本研究は、戦前期のアジア調査研究に関して、これまで未解明であった部分の解明に貢献し、今後の研究の進展に資する

ものとなり得たと考えている。また、戦後から現在に至る日本のアジア調査研究の意義を考える上でも、重要な示唆を与える内容になっていると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

永島広紀、帝国大学『法文学部』の比較史的検討 内外地・正系と傍系・朝鮮人学生、九州史学、第167号、pp.6-30、2014年3月、査読有  
横山尊、九州帝大医学部における民族衛生学・植民衛生学講座 戦前・戦後の水島治夫の学問から、『九州史学』、第167号、pp.58-90、2014年3月、査読有

[学会発表](計3件)

藤岡健太郎、九州帝国大学の満洲国調査研究 農学部を中心に、近代日本研究フォーラム「学術研究の戦前・戦中・戦後 大学史の新地平」、2013年3月9日、九州大学(福岡県福岡市)  
永島広紀、帝国大学<法文学部>の比較史的検討、近代日本研究フォーラム「学術研究の戦前・戦中・戦後 大学史の新地平」、2013年3月9日、九州大学(福岡県福岡市)  
横山尊、九州帝大医学部における民族衛生学・植民衛生学講座 戦前・戦後の水島治夫の学問から、近代日本研究フォーラム「学術研究の戦前・戦中・戦後 大学史の新地平」、2013年3月9日、九州大学(福岡県福岡市)

[図書](計1件)

藤岡健太郎、永島広紀、陳昊、伊東かおり、官田光史、私家版、帝国大学のアジア調査研究 九州帝国大学を中心に 平成24～26年度科学研究費助成事業研究成果報告書、2015年、150頁

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

藤岡 健太郎 (FUJIOKA, Kentaro)  
九州大学・大学文書館・准教授  
研究者番号：00423575

### (2)研究分担者

折田 悦郎 (ORITA, Etsuro)  
九州大学・人文科学研究院・教授  
研究者番号：10177305

永島 広紀 (NAGASHIMA, Hiroki)  
佐賀大学・文化教育学部・准教授  
研究者番号：50315181

陳 昊 (CHEN, Hao)

九州大学・人間環境学研究院・学術協力研究員

研究者番号：50404108

### (3)連携研究者

(なし)

### (4)研究協力者

赤司 友徳 (AKASHI, Tomonori)  
伊東 かおり (ITO, Kaori)  
桂木 勝彦 (KATSURGI, Katsuhiko)  
韓 淑婷 (HAN, Shuting)  
官田 光史 (KANDA, Akifumi)  
横山 尊 (YOKOYAMA, Takashi)